

## エドモントン便り(2)

# 『歯には歯を』

アルバータ大学教授 藤永 茂

カナダでの生活を熱望して移住してきたわけでもない私は、心あたたかき先輩友人に恵まれていたものと職場(九大教養部)での日々を、かすかな心の痛みをともなうて回想することがある。

ただ、これだけはカナダに来てよかったと思うことがひとつある。色々の民族人種の人びと知り合う機会が多いということである。

こうした人種のモザイクの一つのタイルとして生活して得られる経験には忘れがたいものが数々あるが、その中から一つ取り出し、お話ししよう。

イザヤ・ベンダサン著「日本人とユダヤ人」という書物から私は色々のことを勉強したが、中でも「目には目を、歯には歯を」という言葉が私の理解していた意味とはまるで反対の意味を持っていたことを知って驚いた。「……命には命、目には目、歯には歯、手には手、足には足、……をもって償わなければならぬ」(旧約聖書出エジプト記)

しかし、カナダでの日常経験に照らす限り、「こちらの人たちも (eye for eye, tooth for tooth)を『撲られたら撲り返せ』

の意味に使うように思われる。一体、彼等は原典の意味を知っているのだろうか、知らないのだろうか。ある日、私は好奇心を押えかねて、五十人ほどのクラスの学生たちに聞いてみた。

「目には目を、歯には歯を、という表現の意味を君たちは知っているか」

一瞬、教室内に笑い声の流れ、一人の学生が「やれやれこの外人教師はこんなことも知らないのか」といった調子で、「それは、目をやられたら相手の目をつぶす、歯を折られたら、折り返すことだ」ときた。

私は、待つてましたとばかりに、「旧約聖書にある本来の意味はそれと全然違うのを、君たちは知っているか」とやり返して反応を待ったが、クラス全体がすっかり静かになってしまっただけであった。

ところが、講義のすぐあとに、私の部屋のドアをノックして入って来た一人の学生があった。浅黒いひきしまった美しい顔立ちには、鋭い知性と野性的な要素が奇妙に混合していた。

「私はパレスチナ人です。私はあの言葉の原典の意味を知っていました。クラスの中のユダヤ人たちも知っていたと思います」

突然、鋭い風ぼうのパレスチナ青年を目の前にして、私は軽率にもパレスチナ・ゲリラを連想してしまったことを告白しておこう。

「あなたはイスラエル軍がパレスチナ

難民に対して行なっていることをどう思いますか」

私は当惑した。この青年が私から期待している答は余りにも見えすいているように思われた。私はパレスチナ問題についての無知を口実にして、言葉を濁してしまった。しかし、青年は失望の色も見せずに、また話をしに来ると言って立ち去っていった。

それからしばらくして、私はエドモントンのパレスチナ人の集会で、日本人のパレスチナ問題観について話をしてくれという依頼を受けた。その柄でない私は辞退しようとしたが、「イスラエル側は世界中に強力な情宣組織を持って活動しているが、パレスチナ側はまるでみじめな状態にある。あなたが我々の会合に出席してその存在を認めてくれるだけでもよい」ということであった。

当日、会場に行ってみると、七十才の老人から十才の子供までと混ざって四十人ほどが集っていた。心にもない迎合的な言辞を弄するよりも、私自身のパレスチナ問題に対する無知をさらけ出した方がましであろうと考えて、私はおよそ次のような話をした。

私は終戦後アンネ・フランクの日記を読んで感激し、阿姆斯特ダムを訪れる機会がある度にアンネ・フランクの家を見物した。しかし、三度目に家内と一緒に行った時、イスラエルはアンネ・フランクの家を国家的な情宣活動の拠点として利用しているのではないかという疑念がふと私の心をよぎった。いまアン

ネが生きていたら、おそらくイスラエルがパレスチナ難民に対して行なっていることを是認しないのではあるまいか——私の話に対する貪しい拍手が終るのも待たずに、一人の大きな男が立ち上って私に食ってかかった。

「三度目にやっとアンネの家のカラクリに気がつくなんて、あんたの間抜けさ加減にはあいた口がふさがらない。イスラエル側の宣伝にまんまと乗せられるあなたのような人間ばかりだから、我々の苦難が果てしなく続くのだ。ミスター・フジナガ、あなたはパレスチナ人がどんな苦しみを受けてきたか、具体的にどれだけ知っているか。知っていることがあったら、いま我々の前で言ってくれ！」

私は、その男の見暮の激しさに圧倒されて言葉もつげずに立往生してしまった。

その時、壁に近い後部席の一人の女性が静かに立上った。五十才前後の質素な身なりの女性であった。

「自分たちだけがひどい苦難に遭ったのだと、他人に押しつけるのはやめようではありませんか。日本人が、我々こそ原爆の火で一瞬に数万人を惨殺された唯一の民族だ」と言い返してきたら、私たちは何と答えたらよいのですか。失われるひとつひとつの命の尊さは、それがアウシュビッツであっても、ヒロシマであっても、イスラエル空軍の爆撃を浴びるパレスチナ難民部落であっても、同じです。我々こそが一番苦しんで来たのだ、とは決して言ってはならないのです。」

その時の感動は、今も私の胸に新しい。